

弱いつながりを基盤とした地域参加のあり方
—料理を媒介とした共同活動と「静かな市民性」の検討—

【 要 旨 】

ソーシャル・イノベーション研究科
ソーシャル・イノベーション専攻
2026年3月修了
九里 美綺

本研究は、人口減少および高齢化が進行する現代の地域社会に加え、行政サービスや民間サービスの拡充によって、生活上の多くの課題が資本を介して解決可能となり、必ずしも住民同士の互助に依拠しなくても生活が成立するようになった社会状況を背景としている。このような環境の変化の中で、従来型の高いコミットメントや役割負担を前提とした地域参加が、一部の住民にとって持続困難となっている現状に着目し、負担を抑えながら社会との接点を維持し得る地域参加のあり方を検討することを目的とする。

地域活動への参加に対し、「担い手不足」や「無関心」として語られる場面は多いが、本研究では、地域への関心を有しながらも、参加の仕方や関与の水準に困難を感じ、参加が顕在化していない住民の存在に注目する。こうした状況を単なる参加意欲の欠如として捉えるのではなく、関与のあり方そのものの問題として捉え直す立場をとる。

本研究では、地域への関心を持ちつつも、生活条件や心理的負担を踏まえながら関与の度合いを自律的に調整し、無理のない範囲で社会と関わろうとする住民層に着目し、このような態度を「静かな市民性」と位置づけた。また、市民性を到達すべき規範的状态として捉えるのではなく、それを支える前提条件としての基礎的能力に焦点を当て、門脇厚司の理論に基づく「社会力」概念を分析枠組みとして採用した。社会力は、大人への信頼感、他者への配慮、知的好奇心、未知の人への関心、人間への信頼感の五要素から構成される。

調査対象として、長野県伊那市で実施されている「伊那谷ごはんラボ」を取り上げ、ワークショップ参加者へのアンケート調査およびインタビュー調査を実施した。料理という日常的かつ非競争的な共同作業を媒介とする本活動を通じて、参加者の社会力がどのように発現し、低負荷な関係性の中でどのように維持され得るのかを分析した。その結果、参加頻度や役割を固定しない設計、行為目的を伴う共同作業、参加・離脱の自由が担保された場において、参加者は心理的負担を過度に感じることなく他者と関わり、弱いつながりを基盤とした社会的関与を継続していることが明らかとなった。

本研究は、地域参加における消極性を単なる無関心として捉えるのではなく、資本的サービスの普及という社会条件のもとで、住民が自らの生活状況に即して関与の水準を選択している結果として再解釈する視点を提示するものである。これにより、現代地域社会における市民参加の多様なあり方を捉え直すとともに、低負荷で持続可能な関係性形成に向けた参加設計の条件について、実践的示唆を提供する。